
[「ぶろーくん・ふぁんたずむ」 (伝奇小説「組合員の日常」2)]

宇曾田善武

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「「ぶろーくん・ふぁんたずむ」 (伝奇小説「組合員の日常」
2)

【Nコード】

N2152F

【作者名】

宇曾田善武

【あらすじ】

霊や妖怪等の怪異が出現する確率が跳ね上がった社会で、その対応に追われる便利屋『超常事象復旧協同組合』、略称「組合員」の日常を描く短編です。同じ背景世界、人物を使った各話完結の短編です。

（前書き）

大人として子どもたちのために特撮番組を作った全てのスタッフへの敬意と感謝を込めて、この作品を作りました。

* 特撮番組に対する知識が不足されている方には、理解しにくい表現があるかもしれないことをお詫びします。

目を覚ますと、つけっぱなしのテレビには特撮番組が映っていた。あゝ、ケーブルテレビの「なつかしチャンネル」だっけ？ソファに寝転がったまま、ぼんやりと見る。クモの姿をした怪人がビルに糸を吐きつけている。懐かしいな、ドク口頭の正義の味方が悪い奴をやっつけるシリーズだ。最近はや夜の仕事をすると、昼に体がもたなくなってきた。年はとりたくないもんだ。あいつ、背中にコウモリのはねつけてるから、クモーモリだな。記念すべきシリーズ第1作「レッツゴー・ヒーロー」の第1話の怪人だよ。あれ以来、クモ怪人とコウモリ怪人がシリーズの伝統になったんだっけ。

駆けつけた警官隊の銃撃では全く歯が立たない。それにしても、あの怪人、妙に動きがいいな、昔の特撮ってあんなに自由にビルの上を飛び回れたっけ？お、機動隊が出てきた。へー、エキストラの質もいいな、機動隊の動きが統制されていてかなりリアルだ。それにしても、へりからの撮影、とか妙に凝った作りだよな。っていうか、レッツゴー・ヒーローにこんな場面あったっけ？寝ぼけてて頭がしゃっきりしない。コーヒーでも入れるか、と立ち上がったときテーブルに投げっぱなしの携帯電話が点滅しているのに気づいた。ああ、昼寝の邪魔だから居留守モードにしていたっけ。そういえばテレビの音も消しっぱなしだよ。着信履歴、17？ 横峰、横峰、横峰、木澄警察署、木澄警察署、木澄警察署、横峰横峰横峰横峰……？

何かとつても嫌な予感がした。テレビ画面を見る。妙にリアルでやられてもやられてもあきらめずに立ち上がる警官隊。へり撮影や遠方からの映像にかたよったカメラワーク。そもそもオレが「なつかしチャンネル」なんかをつけているはずがない。と、携帯に着信が入った。

はい、一式組合事務所です、ああ、横峰か。悪い、昼寝してた。そう怒るなよ、テレビ、うん、今見てるとこなんだけどさ。リモコンを拾って消音モードを解除する。現場中継でレポーターが必死に叫んでいた。

「信じられるでしょうか、怪人が町を襲っています」

対二種（非霊体・人型）用でありつただけの装備をリアケースに詰め、調べものを知り合いに頼んでから、排ガス規制で現在は絶版になっているヤマハのオフロードバイクDT230ランツァで現場に駆けつけたのがそれから17分後。クモの糸で真っ白に染められたオフィス街では、ごめんごめんと謝るオレに怒鳴り返す元気もなく、横峰刑事が待っていた。

「遅いよ、一式。頼む、なんとかしてくれ」

不審者がいる、との第一報でコスプレをしている変質者とおぼしき人物に職務質問をした不幸な警官をはじめとして、負傷者は24名。ジュラルミンの盾を頼りにファランクス（密集突撃隊形）をとった機動隊員に被害が多かったようだ。幸い、みな命に別状はないとのことだった。他に、パトカー大破3台。いま、上では特殊部隊の要請を検討しているそうだが、状況が状況だけに上の上がかなり渋っているらしい。

こつこつというのは、そういう専門家にやらせろ、化け物の相手で虎の子の精鋭チームをつぶされてたまるか、まあ、だいたいそういうことだろう。

「悪い予感がしたから、オレは最初からお前を当てにしてたんだよ。」

ベテラン一歩手前の横峰刑事には、コスプレした不審者が暴れ出した、という第二報を受けたときから、「組合」向けの事件だとわかってくれていたらしい。理解が早くて助かるのだけれど、肝心のオレがお昼寝中だったので、ベテラン刑事のCANは活かされること

がなかった。すまん。

大暴れして疲れたのか、満足したのか、いま奴は横転させたパトカーの上で仁王立ちしたまま動きを止めていた。オレの想像が正しければ、たぶん奴は特殊部隊はおろか軍隊でも仕留めることはできない。ああ、日本に軍隊はいないことになっていたんだっけ。

携帯に着信が入った。頼んでいた調べものの結果だ。さすがに早い。魔術で加工された通信は、本来携帯メールでは表示しきれないほどの情報量を脳に流し込んでくる。なるほどね、そういうことが事件の背景というか、あらまはわかったの。わかったのだが、だからといって現状が改善されるわけではない。まあ、何もわからないよりは90倍ぐらいマシだし、これはこれで材料として使えないでもないだろう。とにかく、奴と接触しないことにはどうしようもない。

「じゃ、とりあえず、奴にあいさつしてくるから、みんなを下がらせといて。」

なるべく何でもないことのように横峰警部（警部補だったっけ）に声をかけると、バリケード代わりの機動隊輸送車から離れて奴の方に歩き出した。

おい、無茶はするな、という真剣な忠告が飛ぶが、そもそもオレを呼び出したのは無茶をさせるためだろう。気苦労の絶えない奴だ。さて、うまくいけばいいんだが。

「いやあ、あんた強いなあ。参った参った。」

両手をあげて無抵抗のポーズを示しながら、パトカーの上に立つ怪人に心からの言葉を送る。奴はこつちを見て、少し首をかしげた。よかった、いきなり攻撃、とかにはならないみたいだ。

周りでは、横峰をはじめとする警官たちが事件の解決を期待して、そのさらに向こうでは野次馬やマスコミたちがさらなる大事件を期

待して見守っている。

「ちよつと話を聞かせてほしいんだけど、いいかな」

「ただの人間が私に何のようだ」

食いついた。どうやら関心を持ってくれたようだ。

「あなたの組織のことなんだけど。」

『組織』という単語が出た瞬間に奴の反応が変わった。

「貴様！」

パトカーを蹴り、オレとの距離5mを一息につめ、鋭いかぎ爪のついた手でオレを薙ぎはらう。迅い。思っていたよりずっと迅い。予想していなければこの一撃で終わっていたと思う。大げさに地面を転がり、なるべく無様にはいつくばったまま懇願するように話しかける。

「ちよつと、待った待った。悪い話じゃないんだぜ、聞くぐらい損はないって。」

追撃はない。よし。

「あー、もう、こっちはか弱い人間なんだから勘弁してくれよ。」

あなたたちの、世界征服の実現にむけてのアドバイスなんだから。

「き、貴様、なぜ組織の目標を知っている！！」

クモとコウモリの合成怪人は、背中 of 羽根をふるわせてうるたえた。わかりやすい奴だ。

「なあ、あなたの組織って、『シエイカー』だろ？」

その名前は劇的な効果をもたらした。一瞬ビクつと体をすくませた奴は、3mほど後方に跳び下がった。ハトに豆鉄砲、ゴキブリにキンチョール、ちよつと違うか？

「貴様、何者だ、組織の名前まで知るとは！！！！！！」

「それでさ、あなた、さつきこう思ってたろ。なんで、大首領様から連絡がないのかな。この町を占拠したのはいいけど、そのあとどうしたらいいんだろう、って。」

クモ型怪人は、さらに三步あらずさった。だんだんおもしろくな

ってきた。

「な、なぜそのことを」

「ねえ、あなたの部下の「戦闘員」はどこ？」

奴は動きを止めた。おれは大きく周りを見回す。砕けたガラス、ひっくり返った車。あゝあ、ひどいもんだ。

「ご覧よ、あなたにはこれだけの力がある。超一流の改造怪人じゃないか。」

なのに、お供の戦闘員が一人もいないって、不思議だよね。」

「く、貴様ごとき愚民に、我々の何がわかる！」

「うゝん、オレ、ただの人間だから、「世界征服」なんてすごいことが出来るほどの力はないから、あなた達のがよくわからないのは確かだよ。……ところで。」

オレはそこで言葉を句切って、声をひそめた。

「世界征服って、何が楽しいの？」

「何？」

「世界征服するために闘うってことはさ、世界征服するといいいことがあるんだよね。でも、オレ、愚民だからわからないんだ。教えてよ、世界征服ってさ、どんないいことがあるの？」

「貴様、そんなこともわからないのか！世界征服をするとだな、世界を征服できるのだ。当然ではないか、、あれ？」

改造手術を受け、脳の回路に物理的に刻印されたにひとしい組織の至上の任務を問われた奴は、オレとの問答で混乱しかけていた考えを振り払い堂々と答え、ようとして再び混乱した。自分で自分の言葉のおかしさに気づいてしまい、悩みが深まっていく様子が悲しいほどよくわかる。

「あなた、とっても強いよね。誰もあなたには勝てない。世界はともかくとして、この町はあなたが征服した。そうだよ、世界征服の一步を達成したんだよ。」

両手を振り広げ、すこし大げさに彼の活躍を称える。まあ、嘘ではなく基本的には事実だから、いくら大げさに話しても問題はない。

そして、奴に質問をした。

「・・・それで、あんた、いま幸せ？」

「何だと??？」

念願の夢がかなっている、と教えられた怪人は、せわしなく複眼のついた頭をうごかし周りを見た。

彼の象徴であるクモの糸に覆われたビル。彼の力でひっくり返った車、偉大なる彼におびえて距離をとりながら、しかし、彼に対する強い関心をもって取り巻くたくさんの愚民共。彼の考える暴力の支配がこの地に確立している証だ。

「たぶん、あんたが叫べば、みんなひれ伏すよ。だって、あんた征服者だもの。」

でも、それで嬉しいの？さつきパトカーの上に立ったとき、幸せを感じてた？」

答えはない。その答えに内心では安堵しながら、計画通りに話を進める。

「違うよね。オレにはわかる。あんたが欲しいのは、きっとそんなものじゃないんだ。」

怪人の目が変わった。彼にわからない何かを、オレが知っている。オレの中に答えがある、そのことに気づいたようだ。

「言え、貴様、何を知っている!!!」

「あんたさあ、ひとりぼっちなんだよ。」

クモ怪人は無言だった。じっとオレを見て次の言葉を待っている。

「ほら、さつき言つたる、なんでこれほどの一流怪人の偉大な成果に対して、大首領から何の連絡もないか、なんで愚かだいたいして強くないけど、愚直なまでに忠実な戦闘員達がただの一人もいないのか。組織にはあんなにたくさん戦闘員がいるはずなのにね。」

「そ、そうだ、貴様の言うとおりだ。なぜ私はひとりなんだ。」
「ひとりって、寂しいよね。だめな奴でも戦闘員がいたらさ、失敗したときに慰めたりできるし、成功したときに『やりましたね、クモーモリ様!』とか言ってもらえるよね。喜びはわかちあってこそ喜びなんだよ。もちろん、優秀なあんたはその一番大切なことがわかってる。だからこそ、あんたは組織の仲間のためにこんなにがんばってるんだよね。」

教育心理学者のマズローは言った。人間の欲求には段階がある。低次の欲求としては、生物として生存を満たす欲求。つまり第一は危険から脱し安全を希求するもの、第二は生存のために食料を希求するもの、その上で、第三に快適さを求める欲求が発生する。そして、それらが満たされると、社会的な欲求が発生してくる。つまり、誰かに自分を認めてもらいたい、自分がかげがえのないものだと言めて欲しい、という欲求だ。それは、怪人にもあてはまるらしい。

「それなのに、組織はあんたに何も与えてくれない。でも、でも、そんなことは関係ないよね。それでもあんたは大切な組織のためにがんばるんだ。オレ、わかるよ、あんたの気持ち。」

共感。もつとも安価で、しかし効果的に相手の好意を獲得する行為。

すでに奴の両腕、と触手と背中をつばさは重力にしたがって力無くおちている。おれは、親しげに近づくと、肩に手を置いた。

「あんたは良くやった、そう思うよ。」

奴はオレの顔を見た。

「そ、そうか、そうなのか、おれはよくやったのか?」

「ああ、あんたは最高の怪人だ。オレはあんたみたいにすごい怪人は見たことがない。いや、オレだけじゃない、ここにいる誰もがそう思っているさ。」

俺たち二人に注目する群衆を見て、奴はうつすらと涙を浮かべた。
「おれ、やったのか? やったよな、がんばったんだよな!」

ああ、そうさ、あんたは最高さ。たった一人で、よくここまでがんばったよ。

オレはもう一度奴の肩をたたく。よし、もう一押しだ。これで、平和的に解決ができるはずだ。

……そうか、ところで、人間よ、教えてくれないか。

ん、何だ、何か言ったかい？

「私の組織はどうなっているのだ？」

あゝ、うん、そのことか、それはね。

「頼む、教えてくれ、これは、これだけは大切なことなのだ。」

真剣に、本当に真剣に我が子を心配する父親のように、奴はオレに問うた。

「なぜだ、なぜ黙っている、ま、まさか、奴か？ 奴の仕業なのか！
？ 組織は奴にやられたというのか？」

待てよ、そう興奮するなって。

「奴なのだな、そうか、あの裏切り者が、我々の夢を打ち砕いたのだな！？」

いや、違うんだ、それはない、それだけはない。いや、ある面ではその通りなんだけど。

「何だ、はつきり言え、いや、教えてくれ、私は知りたいんだ。真実を、頼む」

あゝ、たぶん、聞かない方がいいと思うよ。

「何故だ！ 何があつたというのだ！！ 私に捨てられたというのならそれはそれでいい。だが、組織と連絡が取れないのだ！！ おかしい、何かがあつたのだ！！ 私はそれが知りたい！！！」

本当に、聞かない方がいいと思うよ、いや、あんたのためなんだって、信じてくれよ。

「私は一流の怪人だ、お前がそういつたではないか、私は、私はどんな残酷な真実にでも耐えてみせる、教えてくれ！！！」

オレ、あんたにはウソをつきたくないんだよ。できるなら隠し事

もしたくない。でも、信じてくれよ、本当に聞かない方がいいんだって。本当だってば。あゝ、知らないぞ、後悔するぞ。本当に聞かない方がいいぞ。それでも聞きたい。そう、そうか。聞きたいか。

「実はね。」

つかみかからんばかりに迫る怪人の触手をやんわりとふりほどき、歩き出す。

「その、すごく言いにくいことなんだけど」

距離、3m。もう少し離れないといけない気がする。だが、これ以上離れるのを許してもらえそうにはない。あゝあ、どこで失敗したんだろ。

オレに情報を流した魔術師の笑い顔が脳裏に浮かんだ。

もう少し上手い言い訳があるのかもしれない。まだ間に合うだろうか。

「教える、早く、早く教えてくれ！」

だめだ、何も思いつかない。

複眼の全てを集中させ、奴はじっとオレの言葉を待っていた。その眼差しは、あまりに純粹で、汚れのないものに見えてしまった。

「あんたさあ」

あゝ、オレ、やっぱりこういうの苦手。

「着ぐるみなんだわ」

自称「どんな残酷な真実にも耐える一流の怪人」は固まった。本当に固まった。オレが全力で硬化呪をかけても実現できないくらいに見事に固まった。

この町の倉庫に、ヒーロー番組の撮影所の保管庫があつてさ、会社が倉庫の維持費がもつたいない、つていうので古い撮影用の着ぐるみを処分したんだよ。でも、その中でひとつだけゴミ袋から落ちた奴があつたみたいなんだよね、一番古い着ぐるみらしくてさ、も

つたいないよね、みんなのためにがんばったんだから、捨てなくてもいいと思うよ、オレも。でき、もう一度捨てるに捨てられず、ほったらかしになってたらしいんだよ、その着ぐるみ。倉庫の隅で。でも、いつのまにか消えていたらしいんだよね。知ってる？昔さ、コマーシャルでもつたいないおばけってあったんだよ。捨てられたニンジンとか大根がさ、でっかいお化けになって、もったいね〜って叫ぶんだよ。あれってさ、嘘じゃなくて、長く使われたものには、魂が宿るんだよね、専門用語じゃ、「つくも神」っていうんだけど。知ってる？漢字で九十九って書いて「つくも」って読むんだよ、難しい言葉だよね〜。

あ〜、まずい。べらべらとしゃべる自分の言葉からどんどん誠意がうしなわれていくのがわかる。

それでね、あんたも、あんたの組織も、実は全部テレビ番組のお話なんだ。だから、あんたの仲間はこの現実の世界にはどこにもいないんだよね〜。すごく人気があったんだよ、オレも見てた。特に第一回の放送であんたをみたときは震えたよ、オレそのときガキだったから、怖くてさ。ビルから飛び降りるアンタの姿、最高だったぜ。ああ、そう、結局その番組の中では、確かにあんたの心配するとおり、あんたの組織は例のホッパー1号にやられちゃったんだよ。でも、安心していいよ、その前に、っていうか、一番最初に1号の必殺技ファイナルキックでやられちゃったのがあんただから、あんたは組織の壊滅を見ることはなかったんだ、良かったよね。

解説をしながら、オレは、じりじりと後ずさっていた。奴はオレの姿なんか見ていなかったのの後退は順調に成功していた。周囲の視線が心なしか痛い。

警官隊も、マスコミも、野次馬も、みな一言も発さず、でもじわじわと包囲の輪を広げている。ドン引きしながら、逃走の準備をし

ている、と言った方がいいのかもしれない。

だからさ、さっきオレがアンタに言ったことはほんとさ、あんたみたいに本当に町を征服した怪人なんていないんだよ、あんた、本当に最高の怪人だよ。みんなそう思ってるよ。嘘じゃない、本当さ、聞いてみようか？ね、そうだよ、横峰、お前もそう思うよね？

なんとか機動隊輸送車までたどり着くことに成功したオレは、笑顔で横峰に同意を求める。

「そんなわけあるか！」

静寂を打ち破る横峰の叫びが引き金になった。ウガアとわかりやすい雄叫びを発した奴は、理性をかなぐり捨てたように暴れはじめた。というより、本当に理性が飛んでいるんだと思う。ああ、途中でまで上手くいったのになあ。

横峰刑事がオレの胸ぐらをつかむ。

「ば、バカヤロウ、一式、お前、事態を悪化させてどうすんだよ！」

「何言ってるんだ、横峰、悪化させたのはお前の叫び声じゃないか。」

やっぱり、語り合える友達がいるのって、いいな。一人で居ることよりずっと幸せだよな、と喜ぶオレの気持ちも知らず、クモ怪人はビルに頭を打ち付けてひびを入れたり、拳をアスファルトにぶち当ててクレーターを引き起こしたりと、見境なく暴れている。幸い、人間が攻撃目標になっていないので人的被害は思ったより少ない。

さて、責任を取るか。

愛車DT230から、リアバックを外し、装具と呪符を準備しながら横峰に警官たちを下げさせるように声をかけた。

「お前、何する気だよ」

「ああ、もうこうなったら、可愛いそうだけど仕留めるしかないからな。」

「仕留めるっていったって、いつもの拳銃魔術で？それとも、まさか、トンファーでぶん殴る気か？」

筆ペンを取り出し、符に紋様を書き込みながら話をする。

「いや、あれじゃ無理だ。ぶっちゃけた話、あいつはただの着ぐるみ妖怪でしかない。とはいえ、今となっては手がだせん。奴は人間の、というか子供たちの幻想を糧に最高級に強化されている。ああ、もう大人になっちまった元子供の幻想も含めてな。横峰、お前も昔は見てたろ？」

そりゃ、まあな、ありゃ、おもしろかったし、と奴も同意する。

「だから、とくに、こういう人の注目が集まっている場にいる限り、あいつは特撮の「クモーモリ」そのものだ。知つての通り、銃弾なんかききやしない。設定では、確か、対戦車ロケットも効かないはずだ。そういう幻想が物理的に実体化したのが奴なんだよ。だから、本物の軍隊をつれてきても、個人で携帯できる範囲の火力ではどうしようもないレベルの怪物だ。ああ、自衛隊は軍隊じゃないんだっけ、細かいこと気にするなよ、まあいいけど。まさか、人間サイズの目標を倒すのにミサイルは撃てないだろ？」

「おまえ、そんな化け物相手にどうするんだよ」

「できれば、おとなしく説得して成仏させたかったんだけどな。ちよつとミスっちゃまった。仕方ないから、奴の弱点をつく。あいつは、幻想そのものだ。ならば、より強い幻想で上書きすれば消滅する。」

「できるのか？そんなこと。」

「幸い、材料がそろってるからなあ。いろんな意味でやりたくないんだけど。」

会話をしながら、自分自身の体と装具に呪符を貼り付け、愛車にも呪符をはり、必要な場所には直接刻印をしていく。あとは、長い

布がいるな。ああ、その君、うん白バイの人、ごめん、そのマフラー貸して。ありがと。

風精の呪印を書き込んだマフラーを襟もとに巻くと、わざと両端を長めに流した。本来は危険防止のためにバイク乗りはひもなどを体から流さない物だが、この場合は仕方ない。

「お前、まさかバイクで突っ込むっていうのか？」

横峰が本気で心配しはじめ。まさか。あ、いやその方法もないことはないけど、奴には別のやり方が効くはずだ。

「じゃ、もっかい行ってくる。あんまり自信ないけど、たぶん上手くいくはずだ。とりあえず、周りの避難と後のことは任せだ。」

横峰はさらに何か言おうとしたが、唇を噛むと警部補の顔にもどり周りに指示をだす。

がれきの山と化したオフィス街の道路の真ん中で、奴は相変わらずでたために暴れていた。かわいそうに、頭から緑の血が出るよ。

「クモーモリ、オレが相手だ」

30mほどの距離を歩いて、バイクにまたがったおれは力強く奴に宣言した。

ここから、幻想との戦いが始まる。

奴の視線がこちらに向く。それを確認した上で、ゆっくりとヘルメットをかぶる。ゴーグルはあえてオフロードバイク用の1枚レンズタイプをやめ、両目が別のレンズになっているものに変えていた。素顔をさらしていたオレの顔が、フルフェイスヘルメットの中に隠れる。濃いグリーンヘルメットのヘルメットにセットされた、光を反射してきらつく2枚のレンズが、夕焼けをうけ赤い目玉のようにぎらついた光を放っているはずだ。奴の脳裏にその輝きが刻まれるのを願った。

キックスタートでエンジンに火をつける。呪印を張り巡らした車

体は剛性があがっている。車体に貼られた精霊符により、点火プラグには雷精の、シリンダーには炎精の、マフラーには風精の加護が宿って性能を限界以上に引き出す。無改造の市販車であっても、レジャーマシンに匹敵する戦闘力を生み出すという反則技だ。

ギアをローにたたき込み、クラッチをつなぐ。右手をひねりアクセルを開け、一気に加速する。

奴まで25m、放たれるクモの糸をスラロームで回避。がれきだらけの路面で崩れる車体の揺れをひざで吸収、17m、奴の口が開く、前方に大きなアスファルトのえぐれ。15m、糸の第2撃が放たれる。13m、思い切り腰を引き加重を後ろに、前輪を浮かし、めくれあがったアスファルトにのせる。すかさず加重を前、タイヤをグリップ、ギアを2段落とし、エンジンを最大回転にたたき込む。エンジン内部では雷精の加護をうけて発生する強力な火花が、シリンダー内に気化したガソリンを瞬時に、そして均等に爆発させる。炎精の後押しを受け文字通りシリンダー内部で爆発する炎はピストンを勢いよく往復させる。その破滅的な勢いでエンジンを覆い尽くす排ガスは、しかし風精により驚くほどなめらかに、一切のロスを生むことなくマフラーを通って流れていく。230cc2サイクルマシンにはあり得ないほどの加速力が生み出された。わずか1mのアスファルト片を即席のジャンプ台と見立てる。前輪から抜重。行け。

オフロードバイクはライダーごと空に飛翔した。浮かび上がる車体のわずかに下を通過する白い糸の束。

高度は4mに到達、だがこれではまだ高さが足りない。ごめん、必ずレストアするから許せ。愛車のステップを蹴り、さらに体を宙に飛ばす。バイクは下に、オレは上に。

高度6mの最高地点に到達、奴との水平距離は5m、首に巻いたマフラーが、2条、空にたなびく。刻まれた紋様が風精を呼び集め、空中でオレに体の自由を与える。

右手でライディングブーツの足裏に貼った発熱呪符に触れる。封

入魔力起動。右足が光り輝く。

姿勢制御ができるとは言え、自由の利かない空中、奴にとっては今のオレは格好の的となるはずだ。

だからオレは、奴に糸を撃たせないための最強の幻想呪文を叫んだ。

「フア~~~~~イナルウ、、、」

異様に低い音で、語尾を延ばして叫ばれるその呪句に、攻撃姿勢に入っていたはずの奴の動きが停止した、まるで魅いられたようにこちらを注視する。幻想世界の法則。最終必殺技を邪魔してはいけない。

自由落下開始。それまでの慣性で、大きく前方に投げ出されるはずのオレの体は、だが風精の加護を受けたマフラーに操られ、急角度でベクトルを変えた。もはやほぼ直下に位置する怪人をとらえる軌道に乗る。愛車の原動機が生み出した速力に加え、位置エネルギーを運動エネルギーに変えて、オレの体は信じがたい速度で奴に肉迫する。

右足はすでに炎に包まれている。高度3m、体内に練り上げた気と共に、たわめていた足を蹴り出す。足の裏が奴の顔面をとらえる。その瞬間に、幻想呪文の最後の一節を唱える。

「キイイイイイイイック~~~~~!!!!!!」

叫びと共に呪符の付帯魔力が全て解放される、0距離接触状態で奴の体の内側に向けて中位発火呪が発動する。怪人の内面で発生した炎は爆発的に奴の体を燃やしつくしていく。

それは、しかし発火呪の力ではない。

人知を越える怪人であるという幻想。その幻想は怪人を打ち破るヒーローという別の幻想に上書きされ、崩壊する。怪人であるが故に、奴はヒーローに敗れなければならないという宿命を持つのだ。たとえそのヒーローがオレというまやかしであったとしても。幻想の幻想による幻想の崩壊。

よりどころを失い、いやむしる役割を終えた怪人は、刹那の時の中で満足そうにオレを見てうなずいた、気がする。

想念により形作られていた体は、幻想の崩壊とともにその蓄えたエネルギーを解放し、爆発を引き起こした。後に残るのは、焼けこげ、ポロポロになった着ぐるみ一つ。

そして、もう一つ。

着地に失敗し、がれきの中で転げ回り、立ち上がれなくなったオレの姿だった。だからやりたくなかったんだよ。

巻き起こる拍手、瞬くフラッシュ、駆け寄ってきた横峰がオレを祝福する。

「一式、すごいぞ、見直したぞ、お前、かつこよかったじゃないか、オレ感動しちゃったよ。やっぱり、ヒーローっていいよな。」

あゝ、うん、そうだな、そうだといけれど。

後に続いてやってくる無責任なマスコミたちを、手際よく部下に足止めさせながら、横峰はオレを抱き起こしにかかる。若い警官達がなんだかあこがれの目でオレを見ているような気がする。

「さあ、立てよ、一式。立ってみんなにその勇姿を見せる。」

「ちよつと待てよ、無茶言つなよ、オレ、ポロぞうきんのようになってるはずなんだけど。今、痛みを切り離してるからわかんないんだけど、たぶん、右足、いつてるよね？」

「大丈夫、もともと人間の足は曲がるようにできてるから、もう一個ぐらい間接が増えても平気だ」

「お前、それ、思いつきり折れてるってことじゃないか、担架持ってきてくれよ。頼むよ。」

「バカ言つな、ヒーローが担架で運ばれていく姿なんか見せていいわけないだろ、立てよ、ほら。」

そういつて、オレより二回りは太い腕で無理矢理体を引き起こす。あ、だめ、足が見えた。ライディングブーツは焼けこげ、所々、は

がれ落ち、足がむき出しになっている。どうも、足首から先は全部火傷しているようだ。右足はひざの先でもう一度体の外側に曲がっている。うわ、見たくなかった。

運ばれた先の警察病院では、怪我の原因を聞かれたので、上手く説明できなかったから、時速90キロで高さ6mから落下して爆弾に飛び込んだ、というような説明をすると、医者に思い切りあきれた。というか二度とするなと怒られた。もちろん、オレも二度とする気はない。

数日間はテレビ特番で「僕らの町のヒーロー」として例の場面をしつこく報道していた。よかった、ヘルメットをかぶっていて本当によかった。また、「ヒーローのお兄さんへ」なんていうお見舞いの品も連日届いたが、退院する頃にはそのバカ騒ぎも終わっていた。ちなみに、山のように届いた見舞いのお菓子や果物は、「見舞い」という名目で何度もしつこく情報料の請求に来ていた魔術師がそのたびにすべて引き取っていった。あいつ、食い過ぎで太らなきやいいんだけど。

なんというか、ヒーローというのは最高の幻想なのだ。風のようにやってきて、悪い奴から僕らを守ってくれる正義の味方。

その幻想がある限り、どんな災難があっても何とかできる、と無邪気に信じて、人はオレにまた無茶な依頼をまわしてくるんだろう。そんな幻想知ったことじゃないと言いたいが、できるなら、なるべくでいいからその幻想が砕けないようにしてみたいところだ。

退院祝いに例の魔術師が送りつけてきたパネル写真を見る。オレとクモーモリが肩を叩き合って涙を流していた。いい趣味してやがる。

奴の言葉を思い出した。

「おれ、よくやったのか？よくやったよな、がんばったよな！」

ああ、あんたも、オレも、よくやったんだ。だから、今日はもう
ゆっくり休もう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2152f/>

[「ぶろーくん・ふぁんたずむ」（伝奇小説「組合員の日常」2）

2010年10月8日15時32分発行